HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	アタヤル語の「サトウキビ」に起きた特異な形態変化
Author(s)	落合, いずみ
Citation	北方人文研究, 15, 85-97
Issue Date	2022-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/84611
Type	departmental bulletin paper
File Information	15_06_Ochiai.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

［論文］

アタヤル語の「サトウキビ」に起きた特異な形態変化*

落合いずみ
（帯広畜産大学）

要旨

アタヤル語（オーストロネシア語族アタヤル語群）の「サトウキビ」として *bilus* という形式が広く見られる。一方でアタヤル語に系統的に最も近い言語であるセデック語は *sibus* という形式であり、二つの形式は一見、関連がないように思われる。このうちセデック語の *sibus* は、オーストロネシア祖語の*Cəbus「サトウキビ」に遡る。一方、アタヤル語の *bilus* はオーストロネシア祖語の形式から逸脱しているように見えるが、本稿ではセデック語と同様にオーストロネシア祖語の形式に遡ることを主張する。アタヤル語の形式の由来を解く鍵となったのが、アタヤル語ツオレ方言系の Takonan 集落で記録された *sabilus* という形式であり、この形式から古くは語頭に *s* を持っていたことがわかる。さらにより古い形式は *səbilus* と推定される。この *səbilus* とオーストロネシア祖語の*Cəbus の間には、前者の語中の *il* を除外すれば、規則的な音対応が見られる。そして、この *il* は、化石接中辞の付加によるものと分析した。このような化石接辞が付加されるのは、アタヤル語群特有の形態変化である。しかもこの化石接中辞は語根 *səbus* の語中子音 *b* の直後に付く（化石中央接中辞と呼ぶ）ため接辞が付加される位置も特異である。変化の流れは、まず *səbus* に化石接中辞〈*il*〉が付き *səb*〈*il*〉*us* になり、Takonan 集落では語頭母音を *a* に替え（*sabilus*）、他の多くのアタヤル集落では前次末音節を脱落させた（*bilus*）。別のツオレ方言系集落では化石接辞附加の起きていない形式 *cubus* が記録されており、これらからアタヤル祖語の「サトウキビ」は *cəbus と再建される。

1．はじめに

アタヤル語はオーストロネシア語族アタヤル語群に属する言語である。台湾先住民族によって話される言語（台湾オーストロネシア諸語と呼ばれる）のひとつである[1)]。アタヤル語群はアタヤル語とセデック語の二つの言語を含む。台湾オーストロネシア諸語は、アタヤル語、セデック語の他に、サイシヤット語、パゼッヘ語、サオ語、シラヤ語、バブザ語、ホアニャ語、ブヌン語、ツォウ語、サアロア語、カナカナブ語、ルカイ語、パイワン語、アミ語、プユマ語、カバラン語、バサイ語、タオカス語など多く言語を含む。台湾における台湾オーストロネシア諸語の分布については図１を

＊ 本稿は 2021 年度海外学術調査フェスタ東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、オンライン（2021 年 6 月 20 日）における研究発表を基にしている。本発表に対しご意見を寄せてくださった方々に感謝する。また、査読者のご助言にも感謝申し上げる。ただし、本稿の不備は筆者にのみ責任がある。

1）ただし、台湾の離島である蘭嶼島で話されるヤミ語は、同じくオーストロネシア諸語であるが、台湾オーストロネシア諸語には含めない。ヤミ語はマラヨ・ポリネシア語群に含まれる。

図 1　台湾オーストロネシア諸語の分布

参照されたい。図 1 中に▲印の付いた言語は消滅したか、または消滅の危機に瀕している言語である。アタヤル語の分布域は灰色の影、セデック語の分布域には縞模様を付けている。本稿の主眼はアタヤル語である。小川・浅井（1935：21）によるとアタヤル語は子音 *q* の有無という音韻的特徴により二系列に分かれるとされる。現在では、*q* を有する系統がスコレック方言、*q* を有さない系統がツオレ方言と呼ばれている。本題では両方言について議論するが、アタヤル語に最も近い言語であるセデック語との比較も適宜行う。

本稿で議論する語は「サトウキビ」である。筆者は 2019 年ごろに台湾北東部に位置する桃園縣で話されるアタヤル語スコレック方言の調査をした。この方言における「サトウキビ」の形式は *bilus* であった。この形式は、同じく台湾北東部に位置するスコレック方言を記録した語彙集にもみられる。例えば 90 年余り前の資料である小川（1931：150）でも *bilus* という形式が挙げられており、40 年余り前の資料である Egerod（1980：69）でも *bilus* という形式が挙げられている。アタヤル語スコレック方言において、この *bilus* という形式が「サトウキビ」として広く用いられている語のようである。

次に、セデック語の「サトウキビ」について述べる。セデック語にはパラン方言とトゥルク方言の 2 つの方言があるとされる（小川・浅井 1935：559）。筆者は 2010 年代にセデック語パラン方言の調査を行ったが、「サトウキビ」は *sibus* という。Rakaw 他（2006：753–754）によるとセデック語トゥルク方言の形式もまた *sibus* である。これら方言の形式から再建されるセデック祖語もまた *sibus となる。アタヤル語スコレック方言の「サトウキビ」である *bilus* とは異なる形式を呈する。

さらに、オーストロネシア祖語の「サトウキビ」について検討してみる。Blust and Trussel（2010）では、オーストロネシア祖語における「サトウキビ」の形式が *Cəbus として再建されている。この再建の根拠となるデータとして、台湾オーストロネシア諸語からはホアニャ語の *sibus* とルカイ語（トナ方言）の *coboso* が挙げられている。このほかにもタガログ語の *tubó* やマレー語の *tebu* なども挙げられている。上記のセデック祖語における *sibus もこれらの同源語である。つまり、セデック語はオーストロネシア祖語の *Cəbus「サトウキビ」を反映した形式を保有している。

一方、アタヤル語の *bilus* はオーストロネシア祖語の *Cebus とは異なる起源をもつように見受けられる。アタヤル語と系統的に最も近いセデック語ではオーストロネシア祖語由来の語を保有しているが、アタヤル語ではオーストロネシア祖語由来の「サトウキビ」を捨て、全く別の語を導入したように見受けられる。しかし *bilus* がオーストロネシア祖語 *Cebus とつながる可能性は皆無

なのだろうか。本稿の目的は、このアタヤル語の *bilus* の来歴をさかのぼり、オーストロネシア祖語とのつながりを探ることにある。アタヤル語の形式が異なる様相を呈することになった由来を特異な変化である、化石接中辞の付加に求める。

2．ツオレ支族 Takonan 集落の「サトウキビ」

小川・浅井（1935：付録 27）におけるアタヤル語スコレック方言における「サトウキビ」は *bilus* であるが[2]、アタヤル語ツオレ方言の「サトウキビ」は *sabilus* と記録されている。このツオレ方言は新竹縣のツオレ系アタヤル集落（Takonan 集落）で収集されたものである（4 節では宜蘭縣におけるツオレ系アタヤル集落で収集された「サトウキビ」について議論する）。

スコレック方言の *bilus* とツオレ方言の *sabilus* を比べると、後者 *sabilus* の語頭には *sa* という要素が付いていることがわかる。この *sa* は、スコレック方言でも元々は付いていたが後に脱落したのではないだろうか。

アタヤル語のアクセントは現代では語末に置かれるが、小川・浅井（1935：22）では次末に置かれることが多く、語末に置かれる場合は、次末音節の母音が曖昧母音であるか、語末子音が声門閉鎖音であるとの条件付きである。このことから、時代をさらに遡ればアタヤル語のアクセントは次末に置かれていたと推測される。アタヤル語に特有の変化として、前次末音節より前の母音における母音弱化がある。これは元々アクセントが置かれていた次末音節より前の母音が曖昧母音に弱化する変化である。ただし、ツオレ方言では曖昧母音がさらに変化を受けて *a* に変わる傾向がある（Huang 2018：273、落合 2020a：146）。議論になっている語 *sabilus* における前次末音節母音 *a* がその例である。これは *səbilus* から来ていると考えられる。アタヤル語において、化石接辞の挿入により、本来次末音節であったものが、前次末音節に移動し、その後、前次末音節が脱落するという変化が起きることがある。例えば、落合（2020b：141–143）ではアタヤル語に *yatux*「上」という語があるが、これはアタヤル語群祖語 *daya「上り」に由来するとし、この祖形に対し *-tux* という化石接尾辞が付加していると考えた。つまり、*daya-tux となった後に、前次末音節の *da* が脱落したことになる。これに即し、スコレック方言に古くは ***səbilus*（仮定的形式に ** を付すことにする）のような形式があったとすれば、そこから前次末音節の *sə* が脱落したのではないかと考えられる。ここまでの議論を表 1 にまとめる。

表 1　ツオレ方言（Takonan 集落）とスコレック方言の「サトウキビ」と古形

	記録された形式	推定される古形
ツオレ方言（Takonan 集落）	*sabilus*	*səbilus*
スコレック方言	*bilus*	*səbilus*

ツオレ方言（Takonan 集落）の形式とスコレック方言の形式において、推定される古い形式は *səbilus* という同一の形式になった。次にこの *səbilus* とオーストロネシア祖語の *Cəbus との関連について探ってみる。表 2 では、それぞれの形式を比べた上で、分節音ごとの音対応の関係を示した。

2）小川・浅井（1935：付録 27）における語頭子音は *β* であるが、本稿ではほかの文献に合わせて *b* で表記している。

表2 オーストロネシア祖語とアタヤル語古形の「サトウキビ」

オーストロネシア祖語	C	ə	b			u	s
アタヤル語の古形	s	ə	b	i	l	u	s

これら二つの形式における音対応を検討する。一つ目の分節音についてであるが、Li (1981：260) によるとオーストロネシア祖語の *C はアタヤル語では *c* ［ʦ］または *s* で対応する（より詳しく説明すると、スコレック方言では *s* で対応し、ツオレ方言は一部の集落では *s* で対応し、その他の集落では *c* で対応する)。ここでのアタヤル語の古形は *s* なので、規則的な音対応が見られる。二つ目の分節音はオーストロネシア祖語では *ə* であり、アタヤル語の古形でも *ə* である。これは一見一致しているようだが、アタヤル語の古形の方ではこの母音は前次末音節に含まれるため、母音弱化を被ったための曖昧母音であると見なされる。そのため分節音が一致しているとは必ずしも言えない。三つ目の分節音は両形式ともに *b* で一致している。次に両形式を後方から検討する。最終分節音は両形式ともに *s* で一致している。後ろから二つ目の分節音も両形式ともに *u* で一致している。

両形式の音対応の割合は高いのだが、問題なのはアタヤル語の古形の語中に見られる *il* という要素である。この要素に相当するものはオーストロネシア祖語の形式にはない。オーストロネシア諸語において典型的な語の音節数は二音節であることを考え合わせれば、二音節から成るオーストロネシア祖語の「サトウキビ」のほうが、音節数的により典型的である。だとすれば、アタヤル語の古形に見られる *il* という要素は、語中に付け加えられたものと見なせないだろうか。次節ではその可能性を化石接中辞に求める。

3．アタヤル語群の化石辞辞とその分類について

Li (1985) によると、アタヤル語群には機能の不明な特殊な接辞が見られるが、それがアタヤル語群を語彙的に他のオーストロネシア諸語から逸脱させている要因だと述べている。それらは接尾辞か接中辞かどちらかで現れる。接尾辞については、Li（1985）より以前に、小川・浅井（1935：25）も、他のオーストロネシア諸語の語彙と比較の上で、アタヤル語に見られる特殊な接尾辞の十数形式を特定している。落合（2020a：142-143）は、アタヤル語群におけるこれらの特殊な接辞を「化石接辞」と呼ぶ。これは化石接尾辞と化石接中辞に分かれる。

化石接中辞の挿入された形式について、Li（1985）にはアタヤル語とセデック語から、Li and Tsuchida（2009）にはアタヤル語からの語例がそれぞれ数例挙げられているが、それら先行研究において、化石接中辞の付加される位置については詳しく議論されていない。Ochiai (2018a) はセデック語の二つの方言、パラン方言とトゥルク方言を比較し、化石接中辞の挿入される位置は、語の前方と後方の二箇所あると主張した。それぞれを front infix（前方接中辞)、back infix（後方接中辞）と呼んだが、本稿では落合（2020a：143）における用語を採用し、化石前方接中辞、化石後方接中辞と呼ぶ。化石前方接中辞は語頭子音の直後に挿入される。これが通言語的に接中辞の挿入される位置である。アタヤル語群が通言語的に特異な点は、化石後方接中辞を持ち、これが最終音節の母音の直後に挿入されるところである。

例えば化石前方接中辞の例はセデック語トゥルク方言の *r*〈*ən*〉*abaw*「葉」に見られる〈*ən*〉である[3)]。セデック語パラン方言の同源語は *rubag-an*「夏」で、時空を表す接尾辞*-an* の付いた形式であ

3）Ochiai（2019：139）に詳述されている。

り、セデック祖語は *rabag となる。セデック語トゥルク方言では語頭子音の *r* の直後に〈*ən*〉が挿入される。この〈*ən*〉の他にも Ochiai（2018a）において〈*əl*〉と〈*ər*〉がセデック語における化石前方接中辞の形式として挙げられている（表 3）。

次に、化石後方接中辞の例は、セデック語パラン方言の *hupure*「調理する」に見られる[4]。セデック語パラン方言の語末母音の *e* は二重母音 *ay* に遡るのでより早い時代には *hupu*〈*ra*〉*y* と言った。この中にある〈*ra*〉が化石後方接中辞である。最終音節の母音 *u* の直後に挿入される。セデック語トゥルク方言での同源語は *hapuy* であり、化石後方接中辞の挿入が見られない[5]。この〈*ra*〉の他にも、Ochiai（2018a）において〈*na*〉がセデック語における化石後方接中辞の形式として挙げられている（表 3）。

アタヤル語における化石接辞については、Li and Tsuchida（2009：335）において、本稿の分類によるところの化石前方接中辞と化石後方接中辞の形式が挙げられている。化石前方接中辞としては〈*a*〉、〈*ag*〉、〈*al*〉が見られる。ここでの母音はすべて *a* だが、化石前方接中辞が現れる位置は前次末音節またはそれより前の音節である。これら次末音節より前の音節は、母音弱化を被る（小川・浅井 1935：21）。アタヤル語において弱化母音は典型的に曖昧母音であるが、アタヤル語ツオレ方言においては弱化母音が、*a* で現れる傾向がある。Li and Tsuchida（2009：335）における語例は全てアタヤル語ツオレ方言の形式であることから、化石前方接中辞における母音 *a* は弱化母音だと判断される。より早い時代の形式はそれぞれ〈*ə*〉、〈*əg*〉、〈*əl*〉であったと考えられる（表 3）[6]。

アタヤル語の化石後方接中辞については、Li and Tsuchida（2009：355）と Li（1985：258）にそれらの挿入された形式を認めることが出来る。形式としては〈*ya*〉が見られ、これは Li（1985：258）によるとアタヤル語群祖語の *〈ra〉に遡ると言う。ただし、ツオレ方言集落の少数において〈*ra*〉が保存されている。また、〈*na*〉という形式も見られる（表 3）。

さらにアタヤル語が特異なのは、語根の前方でも後方でもなく、中央に挿入される化石接辞が見られる点である。これを本稿では化石中央接中辞と呼ぶことにする。化石中央接中辞は、アタヤル語において典型的な語の二音節構造 CVCVC において、最終音節のオンセットの直後に挿入されるタイプである。化石中央接中辞の音節構造は〈VC〉または〈V〉であり、これが語根に挿入されることで CVC〈VC〉VC または CVC〈V〉VC という構造の語ができる。

Li（1985：258）と Li and Tsuchida（2009：355）には、化石中央接中辞が挿入されていると判断できる語形がいくつか挙げられている。それらをまとめて得られた化石中央接中辞の形式は〈*i*〉、〈*il*〉、〈*in*〉の三つであった（表 3）。これらに共通なのは母音がすべて *i* である点である。

Li and Tsuchida（2009：355）から例を挙げると、スコレック方言の「臼」は *luhuŋ* であるのに対し、ツオレ方言（Mayrinax 集落）は *luh*〈*i*〉*uŋ* である。スコレック方言の「バナナ」は *quguh* で

4）Ochiai（2016：309–310）に詳述されている。

5）因みに、セデック語パラン方言において第一音節の母音が *u* である。セデック語トゥルク方言の形式ではこれに相当する母音は *a* である。これはセデック語パラン方言において本来 *a* であった母音が、化石後方接中辞の挿入により前次末音節に移動したことで母音弱化を被ったためである。セデック語の強勢は次末音節におかれ、それより前の音節における母音が弱化する。曖昧母音になるのが一般的だが、セデック語パラン方言では弱化母音は *u* で現れる。

6）これに関連して、Li and Tsuchida（2009：354）では子音のみの〈*g*〉が接中辞（本稿の化石前方接中辞）として挙げられている。これは筆頭著者の Li 氏の著書（Li（1981）など）から、アタヤル語の曖昧母音を表記しない方針が見て取れる。そのため実際は、曖昧母音を伴った〈*əg*〉の可能性が高い。

あるのに対し、ツオレ方言（Mayrinax集落）は *guq*〈*il*〉*uh* である。スコレック方言の「獣」が *qasug* であるのに対し、ツオレ方言（Mayrinax集落）は *qas*〈*in*〉*ug* である。これらの例ではスコレック方言が原型を保ち、ツオレ方言（Mayrinax集落）では化石中央接中辞の〈*i*〉、〈*il*〉、〈*in*〉をそれぞれ挿入している。

表3 アタヤル語群における化石接中辞の形式

	アタヤル語	セデック語
化石前方接中辞	〈*a*〉、〈*ag*〉、〈*al*〉	〈*əl*〉、〈*ən*〉、〈*ər*〉
化石中央接中辞	〈*i*〉、〈*il*〉、〈*in*〉	---[7]
化石後方接中辞	〈*na*〉、〈ya〉（←*〈ra〉）	〈*na*〉、〈*ra*〉

2節においてアタヤル語の「サトウキビ」の古形である *səbilus* は、語中の *il* を除けば、オーストロネシア祖語の形式 *Cəbus と規則的な対応を示すことを述べた。上記の議論を踏まえ、この *il* が化石中央接中辞であると提案したい。表3にあるように〈*il*〉は、アタヤル語の化石中央接中辞としてあり得る形式である。挿入されている位置も、化石中央接中辞の定義の通り、仮定される語根 *səbus* の最終音節のオンセット *b* の直後である。

だとすれば、以下の変化の流れを経たことになる。まず語根 *səbus* に化石中央接中辞〈*il*〉が挿入され、*səb*〈*il*〉*us* になる。アタヤル語では前次末音節の母音が弱化して曖昧母音になるが、この形式ではその位置に移った母音が元来曖昧母音である。ツオレ支族Takonan集落では弱化母音の前次末音節が *a* に変わる変化が起きた。スコレック方言では前次末音節を脱落させ *b*〈*il*〉*us* に変えた。この音節脱落により、語根 *səbus* との関連がわかりにくくなった。この分析を念頭に、次節では特にアタヤル語ツオレ方言における「サトウキビ」の多様な形式を検討し、これまでの仮の語根 *səbus* に修正を加え、最終的にアタヤル祖語の「サトウキビ」を再建する。

4．宜蘭縣におけるアタヤル集落の「サトウキビ」のデータ

李（1996）は宜蘭縣における台湾先住民族の言語を概観した書であるが、その中に宜蘭縣におけるアタヤル族の集落において収集した基礎語彙集も付されている。「サトウキビ」も含まれており、14もの集落からの形式を挙げている。そのうち8集落がスコレック方言、6集落がツオレ方言からのものである。本節ではこの豊富な「サトウキビ」のデータを基に、前節までの分析をさらに深める。

図2は李（1996）が語彙を収集した宜蘭縣のアタヤル集落を示す[8]。図2では李（1996）による、各集落における方言分類も付した。

表4に李（1996）がこれらの集落で収集した「サトウキビ」の形式を示す。

7）セデック語において化石中央接中辞が挿入されている語を著者はまだ見つけていない。

8）図2ではアタヤル語による集落名をローマ字表記している。それぞれの集落の中国語による名称を以下に記す。Pyanan（南山）、Lmuan（留茂安）、Habun Bazinuq（崙埤）、Syanuh（松羅）、Kulu（寒渓）、Haga-Paris（武塔）、Kubaboo（南澳）、Rghayung（澳花）、Skikun（四季）、Mnaywan（碼崙）、Mkgugut（東澳）、Phahaw（碧候）、Ryuhing（金岳）、Mtlangan（武塔）、Kingiyan（金洋）。このうち、武塔という同一地域においてはHaga-ParisとMtlanganという二つの集落が認められるが、前者がスコレック支族の集落、後者がツオレ支族の集落である。また李（1996：203）における「サトウキビ」の項目については、Knngyan（金洋）集落からの語形は載せられていない。

図２　宜蘭縣におけるアタヤル集落の分布

表４　宜蘭縣のアタヤル集落における「サトウキビ」

スコレック支族の集落	
Pyanan	*bilus*
Lmuan	*bilus*
Hbun Bazinuq	*bilus*
Syanuh	*bilus*
Kulu	*bilus*
Haga-Paris	*bilus*
Kubaboo	*bilus*
Rghayung	*bilus*
ツオレ支族の集落	
Skikun	*libus*
Mnawyan	*libus*
Mkgugut[9)]	*bilus*
Pyahaw	*cubus*
Ryuhing	ʔ*tu*ŋ
Mtlangan	*tu*ŋ

まず表 4 からわかるのは、スコレック方言が話される 8 つの集落（Pyanan 集落から Rghayung 集落まで）において、全て *bilus* で統一されていることである。ツオレ方言が話される 6 つの集落における形式にはばらつきが見られる。それぞれの形式から判断して、以下の 4 つの型に分類されうる。一つ目は、Mkgugut 集落の形式で、これはスコレック方言と同一形式の *bilus* である（4.1 節）。二つ目は Skikun 集落と Mnawyan 集落の *libus* という形式である（4.2 節）。三つ目は Pyahaw 集落の *cubus* という形式である（4.3 節）。そして四つ目は Ryuhing 集落と Mtlangan 集落にそれぞれ見られる *ʔtuŋ* と *tuŋ* という形式である（4.4 節）。これらツオレ方言における種々の形式について以下で議論する。

4.1　Mkgugut 集落の「サトウキビ」

李（1996：203）において Mkgugut 集落の「サトウキビ」は *bilus* である。これはアタヤル語スコレック方言の *bilus* と同一形式である。表 4 においてツオレ支族の集落として挙げられている 6 つの集落のうち、スコレック方言と同一形式の「サトウキビ」を持つのは Mkgugut 集落のだけである。これには二つの分析が可能である。

一つ目は、同じくツオレ支族に属する Takonan 集落で記録された *sabilus*（2 節）のような、化石中央接尾辞が挿入された形式を Mkgugut 集落でも持っていたが、後に前次末音節を脱落させて *bilus* になったという可能性である。

もう一つは、Mkgugut 集落でも本来は宜蘭縣の他のツオレ支族集落に見られるような別の形式を持っていた。それを、スコレック支族との接触によってスコレック方言の形式である *bilus* に取り換えたという可能性である[10)]。図 2 にあるように Mkgugut 集落の北西にはスコレック支族の Kulu 集落が位置している。森（1917：20）が両者の間に交通があったことを述べているため、もし Mkgugut 集落がスコレック支族と接触していたとしたら、Kulu 集落のスコレック支族とであろう。スコレック方言から *bilus* を取り入れたとしたら、Kulu 集落から取り入れた可能性が高い。

4.2　Skikun 集落と Mnawyan 集落の「サトウキビ」

李（1996：203）によると Skikun 集落と Mnawyan 集落の「サトウキビ」は *libus* である。これは *bilus* に音位転換が起こった形式であると考えられる。この *bilus* の語頭子音の *b* と語中子音の *l* が交替して *libus* となったのだろう。これら二つの集落にのみ音位転換が起こっているため、これら二つの集落の関連の強さが窺える[11)]。

音位転換を起こす前の形式は *bilus* である、この点についても 4.1 節の Mkgugut 集落の分析と同じ二つの可能性がある。本来 *sabilus* のような形式を持ち、そこから前次末音節を脱落させたか、本来は別の形式を持っていたが周辺のスコレック支族からスコレック方言の形式である *bilus* を取り入れたかである。図 2 にあるように、これら集落は蘭陽渓という河川のほとりに位置し、同一河

9）移川他（1935：31）によると、この集落にはアタヤル族の他にセデック族も混在している。

10）これに関連して、落合（2021）は本稿と同じく李（1996）に記録された宜蘭縣アタヤル集落の「家」を検討し、スコレック方言は *ŋasal* という形式、ツオレ方言は *sali?* という形式を持っていることを主張した。ただし多くのツオレ集落において本来の *sali?* がスコレック方言の *ŋasal* に置き換わったことを述べている。Mkgugut 集落はスコレック方言への置き換えが起こった集落の一つである。

11）李（1996：193）でも両集落の単語の類似性が高いため、分離してからそれほど時間が経っていないことが予想されると述べている。

川の隣の集落にスコレック支族の集落が位置している（ツオレ支族 Skikun 集落に対しスコレック支族 Pyanan 集落、ツオレ支族 Mnawyan 集落に対しスコレック支族 Syanuh 集落）。

4.3　Pyahaw 集落の「サトウキビ」

李（1996：203）における Pyahaw 集落の「サトウキビ」は *cubus* である。上記の Mkgugut 集落は bilus、Skikun 集落と Mnawyan 集落は早い段階において *bilus* を持ち、スコレック支族との接触が疑われたが、Pyahaw 集落はこの形式を持たない。それどころか、Pyahaw 集落の *cubus* は、オーストロネシア祖語 *Cəbus の反映形と考えられる。それぞれの音対応は次末音節の母音 *u*（Pyahaw 集落の形式）と *ə（オーストロネシア祖語）を除けば一致している。Pyahaw 集落の形式において期待される次末音節母音は *ɐ* である。なぜ期待に反し *u* で現れるのかは不明である[12]。

2 節で述べたように同じくツオレ支族に属する Takonan 集落では *sabilus* という形式であった。これは想定される古形 *səbus* に対し化石中央接中辞〈*il*〉を挿入したものである。Pyahaw 集落の形式では化石中央接中辞の挿入は見られず、オーストロネシア祖語をそのまま反映した形式を保持している。なぜ Pyahaw 集落だけは古い形式を保持し、化石中央接辞の挿入が起こらなかったかは不明である[13]。

4.4　Ryuhing 集落と Mtlangan 集落の「サトウキビ」

李（1996：203）によると Ryuhing 集落と Mtlangan 集落の「サトウキビ」はそれぞれ *ʔtuŋ* と *tuŋ* である。両形式は明らかに関連している。これら形式はアタヤル語としては奇妙な語形である。まず *ʔtuŋ* のように声門閉鎖音から始まる語はアタヤル語固有の語には見られない。

また、*tuŋ* のような CVC の音節構造を持った一音節語もアタヤル語固有の語としてはとても少ない。このことから、外来的な由来が疑われるのだが、管見の限り周辺の台湾オーストロネシア諸語において「サトウキビ」に類似の形式を探すことはできなかった。これら二つの集落における改新的語彙という可能性もある。ただ、これら二つの集落がなぜこの形式を持つに至ったかは不明である[14]。

4.5　アタヤル語の「サトウキビ」のまとめ

ここまでの議論をまとめる。アタヤル語スコレック方言の「サトウキビ」は *bilus* である。アタヤル語ツオレ方言の形式は様々見られた。Takonan 集落（新竹縣）は *sabilus*、Mkgugut 集落は

12）著者の憶測だが、脚注 6 にも述べたように Li 氏はアタヤル語の曖昧母音を表記しない方針である。そのため本来は *cəbus* と発音されていたかもしれないが、この *ɐ* を書くわけにいかないので *cbus* にしたかったが、次末音節の母音を完全に脱落させてしまうには、次末音節の母音の聞こえ度があまりに高く、何か母音を表記しようとした結果、*a* でもなく *i* でもなく *u* を選ぶことにしたのではないだろうか。または子音 *c* の直後で曖昧母音が *u* に変わりやすい傾向があったのかもしれない。

13）落合（2021）は、は本稿と同じく李（1996）に記録された宜蘭縣アタヤル集落の「家」を検討し、スコレック方言は *ŋasal* という形式、ツオレ方言は *sali?* という形式を持っていることを主張したが、ツオレ支族の集落の中で本来の形式である *sali?* を示したのは Pyahaw 集落ののみであった。他の集落は別の形式を持つか、スコレック方言への置き換えが起こっている。このように他の語彙に置いても Pyahaw 集落が古風を保っていることが窺える。

14）あるいは、昔はこれら集落の近隣に居住していたが、記録が残される前に消滅してしまった言語から、その言語の「サトウキビ」を取り入れたのだろうか。

bilus である。また、Skikun 集落と Mnawyan 集落の *libus* は、*bilus* の語頭・語中子音を音位転換させたものである。これらはすべて化石中央接中辞〈*il*〉の挿入された形式である。

最も古風を保っているのは Pyahaw 集落であり、オーストロネシア祖語 *Cəbus の反映形である *cubus* を持つ。化石中央接中辞の挿入は起こらなかった。

Ryuhing 集落と Mtlangan 集落の *ʔtuŋ* と *tuŋ* はその由来が不明である。これらを表 5 にまとめる。

表 5　アタヤル語の方言における「サトウキビ」

	スコレック方言	ツオレ方言
オーストロネシア祖形の反映形		*cubus*
化石中央接中辞〈*il*〉の挿入された形式	*bilus*	*sabilus*、*bilus*、*libus*
由来不明		*(ʔ)tuŋ*

また、Takonan 集落の形式から推定された古形 səbus と Pyahaw 集落の *cubus*（期待される形式は *cəbus*）から想定されるアタヤル祖語は *cəbus となる。語頭は *s* か *c* かで現れるが、Li（1981：260）によるとアタヤル語においてこれら子音が揺れて出現する場合は、オーストロネシア祖語の *C を反映している。この子音に対し、Li（1981：260）はアタヤル語群祖語に *c を再建している[15]。

5．おわりに

前節でアタヤル祖語の「サトウキビ」を *cəbus と再建した。また、セデック祖語は *sibus と再建されうる。オーストロネシア祖語は *Cəbus であることを考慮し、アタヤル祖語とセデック祖語の形式からアタヤル語群祖語の「サトウキビ」を再建すると *cəbus となる。これはアタヤル祖語と同一形式である。これら再建形を表 6 にまとめた。

セデック祖語では語頭子音が *s* に変わった。これは Li（1981：260）によると規則的な音変化である。ただし、Li（1981：260）ではセデック語パラン方言において *C（オーストロネシア祖語）が *c* で保たれているとする。ただし、アタヤル語ツオレ支族万大方言にある *cumaʔis*「縫う」（Li 1981：292）のセデック語パラン方言における同源語は、期待される *cumais* ではなくて *sumais* である[16]。語によってはセデック語パラン方言でも変化がさらに進んで *s* に変わることもあるらしい。ここではセデック語パラン方言の *sibus* の語頭子音も本来なら *c* であるはずだが、変化が進んで *s* に変わったと考えらえる。

また、その直後の母音として期待されるのは *ə* であるが、セデック祖語ではこれが *i* に変化した。これは規則的な音変化ではないが、直前の母音 *s* の調音位置が影響し、この子音に調音位置がより近い *i* が好まれたと考えられる。もしかしたら、セデック祖語のより古い段階では *cəbus*（アタヤル語群祖語と同形）であり、そこから語頭子音が *s* に変わり *səbus* となって、さらに *s* 直後の母音が *i* に変わって *sibus* になったという変化の流れがあったのかもしれない[17]。

15）Li（1981：260）ではアタヤル語群祖語から一段階下ったアタヤル祖語における子音を再建していないが、アタヤル語ツオレ方言において *c* が保有されている場合があるためアタヤル祖語においても *c が期待される。

16）この例は落合（2020c：80）にも言及されている。

17）この *sibus* の例のように、セデック語の次末音節オンセットの子音 *s* の直後の曖昧母音が *i* に変わる例

表 6　アタヤル語群祖語の「サトウキビ」の再建

アタヤル祖語	セデック祖語	アタヤル語群祖語	オーストロネシア祖語
*cəbus	*sibus	*cəbus	*Cəbus

アタヤル語に広く見られる「サトウキビ」の形式 *bilus* は、その由来がわからなかったが、ツオレ支族 Takonan 集落に *sabilus* という形式が報告されていたのを見つけたことで、化石中央接中辞として〈*il*〉が、想定される語根 *səbus* に付加された可能性が開けた。そして、ツオレ支族 Pyahaw 集落に *cubus* という形式が報告されていたのを見つけたことで、これがオーストロネシア祖形を反映した保守的な形式であることがわかった。

この保守的形式を除けばアタヤル語に広く見られるのは *bilus* 系列の語（*sabilus* と *libus* も含む）であるが、これらは化石中央接中辞の付加という特異な形態変化を経たためにオーストロネシア祖形との関連性が見えにくくなっている。

参考文献

Blust, Robert and Stephen Trussel (2010) *Austronesian Comparative Dictionary, Web Edition*. http://www.trussel2.com/ACD/.

Egerod, Søren (1980) *Atayal-English dictionary*. London: Curzon.

Huang, Hui-chuan J. (2018) The nature of pretonic weak vowels in Squliq Atayal. *Oceanic Linguistics* 57(2): 265–288.

Li, Paul Jen-kuei (1981) Reconstruction of Proto-Atayalic phonology. *Bulletin of the Institute of History and Philology, Academia Sinica* 52(2): 235–301.

Li, Paul Jen-kuei (1985) The position of Atayal in the Austronesian family. In Andrew Pawley and Lois Carrington (eds.) *Austronesian linguistics at the 15th pacific science congress*, 257–280. Canberra: Pacific Linguistics.

李壬癸（1996）『宜蘭縣南島民族與語言』宜蘭：宜蘭縣政府.

Li, Paul Jen-kuei and Shigeru Tsuchida (2009) Yet more Proto Austronesian infixes. In Bethwyn Evans (eds.) *Discovering history through language: papers in honour of Malcolm Ross*, 345–362. Honolulu: University of Hawaii Press.

森丑之助（1917）『臺灣蕃族志』第一巻．台北：臨時臺灣舊慣調査會.

Ochiai, Izumi (2016) Bu-hwan vocabulary recorded in 1874: Comparison with Seediq dialects. *Asian and African Languages and Linguistics* 10: 287–324.

Ochiai, Izumi (2018a) Inconspicuous infixation in Seediq, presented at The 28th Annual Meeting of the Southeast Asian Linguistic Society 2018 年 5 月 19 日 Wenzao Ursuline University.

Ochiai, Izumi (2018b) Ryuzo Torii's Paran Seediq Glossary (1900): Annotation and observation, *UST*

は、管見の限り見つけられない。しかし 20 世紀初頭のセデック語の語彙を集めた鳥居（1900a：71）はセ、セデック語の「四」として *shipat* という表記を用いている。これは *səpat*「四」を表記したものであり、次末音節の曖昧母音が音声的に *i* に近かったことをうかがわせる。また、鳥居（1900a、1900b）では、前次末音節または前々次末音節のオンセットの子音 *s* の直後の曖昧母音（ここでは次末音節より前の母音が、母音弱化を受け曖昧母音になっているもの）が、*i* で表記される場合があることが多い。そのことは、鳥居の表記を推定的な音素表記にした Ochiai（2018b：136）における子音 s に関わる表に見て取れる。

Working Papers in Linguistics 10: 113–143. Hsinchu: Gratuate Institute of Linguistics, National Tsing Hua University.

Ochiai, Izumi (2019) Formosan “leaf”: A reconstruction. *The Kobe Gaidai ronso* 71(1): 135–152.

落合いずみ（2020a）「アタヤル語群における「肩」の再建」『アジア・アフリカ言語文化研究』100：141–153.

落合いずみ（2020b）「アタヤル語群の『上り』と『下り』の起源」『京都大学言語学研究』39：137–148.

落合いずみ（2020c）『十九世紀末のセデック語資料『埔里社撫墾署管轄北蕃語集』—百余年後の言語学的考察—』札幌：北海道大学アイヌ・先住民研究センター.

落合いずみ（2021）「アタヤル語群における「家」と「屋内」の関連」『島嶼地域科学』２．（近刊）

小川尚義（1931）『アタヤル語集』台北：台湾総督府.

小川尚義・淺井恵倫（1935）『原語による台湾高砂族伝説集』台北：台北帝国大学言語学研究室.

Rakaw, Lowsi, Jiru Haruq, Yudaw Dangaw, Yuki Lowsing, Tudaw Pisaw, and Iyuq Ciyang 編（2006）『太魯閣族語簡易字典』秀林郷：秀林郷公所.

鳥居龍蔵（1900a）「台湾埔里社霧社蕃の言語（東部有黥面蕃語）」『東京人類学会雑誌』176：71–74.

鳥居龍蔵（1900b）「台湾埔里社霧社蕃の言語（東部有黥面蕃語）」『東京人類学会雑誌』177：100–104.

移川子之藏・宮本延人・馬淵東一（1935）『台湾高砂族系統所属の研究』台北：台北帝国大学土俗人種学教室.

“Sugarcane” in Atayal: A unique morphological change

Izumi OCHIAI
(Obihiro University of Agriculture and Veterinary Medicine)

This paper discusses that *bilus* “sugarcane” in Atayal (Atayalic, Austronesian) is a reflex of Proto-Austronesian *Cəbus “sugarcane.” The Atayal form is common in one of its dialect, Squliq Atayal. This form is also seen in another dialect, C’uli’ dialect, however a few villages belonging to C’uli’ dialect have different forms. The relationship between *bilus* and *Cəbus is obscured because the Atayal form underwent an aberrant sound change. An infix of unknown function is inserted in the middle of a word. There are similar types of infixation which attaches to a word initial position or a word final position. These types of infixes are called fossilized infixes. They are characteristics of the Atayalic languages including Atayal and Seediq. The infixation to the middle of the word is referred to as fossilized middle infix in this paper. A clue to solve the origin of *bilus* was provided by a cognate form *sabilus* reported only in Takonan village (belonging to C’uli’ dialect) in the 1930s. The earlier form inferred from *sabilus* is *səbilus. This form suggests that *bilus*, the form commonly used across Atayal villages had a segment *s* word-initially. Tentatively reconstructed form *səbilus and the Proto-Austroensian *Cebus show sound correspondences except for the segments *il* in the

middle of *ˀsəbilus*. This paper proposes that this *il* is the fossilized middle infix, which is attached right after the middle consonant. That is, the original form is *səbus*, and the infix is inserted after *b*, resulting in *səb*〈*il*〉*us*. In Takonan village, the schwa changed into a, resulting in *sabilus*. In other Atayal villages, the antepenultimate syllable *se* dropped. In Pyahaw village of C'uli' dialect, the form *cubus* is reported as "sugarcane." This form has no infixation. Based on the inferred form *səbus* and the observed form *cubus*, a Proto-Atayal form is reconstructed as *ˀcəbus*.